1976年2月25日 第３種郵便物認可（毎週４回月・火・木・金曜発行）2021年5月4日SSKO通巻10779号「おあしす通信」2021年4月号

SSKO

おあしす通信

編集　キープハート（おあしすの事業を支える市民の会）

～ 東日本大震災から10年、熊本地震から5年 ～
2016年～2021年　被災地支援特集号

南相馬沿岸部「かしまの一本松」跡地
津波に生き残った松があった場所に今は風車がまわる
（二〇一八年九月撮影）

おあしす福祉会では2011年の東日本大震災以降、利用者支援の一環として被災地支援活動の取り組みをおこなっています。この活動は障害がある方々と被災した方々の相互の回復（リカヴァリー）に大きな効果をあげてきました。本紙では10年にわたる支援のうち、多くの方々の協力を得て東北だけでなく熊本、福岡にも広がった2016年から2021年の活動を振り返ります。

＝キープハートは精神障害をもつ人々の社会参加のための様々な事業を支援しています＝

社会福祉法人おあしす福祉会
〒136-0076　東京都江東区南砂3-4-6　TEL03-5690-5959
http://www.oasisfukushi.or.jp/

就労継続支援B型事業所
■　オアシス・プラス
〒135-0021　東京都江東区白河4-7-2　　TEL03-5646-7811
■　コム・オアシス
〒136-0076　東京都江東区南砂3-4-6　　TEL03-5690-5959

多機能型（就労継続支援B型・就労移行支援/就労定着支援）事業所
■　ピアワーク・オアシス
〒135-0001　東京都江東区毛利1-7-3　　TEL03-5638-1775

地域活動支援センター/指定（特定・一般）相談支援事業所/自立生活援助事業
■　ウィル・オアシス
〒135-0002　東京都江東区住吉1-17-20住吉ビル4階　　TEL03-6284-0545

共同生活援助事業／グループホーム
■　第2クローバーハウス

おあしす利用者家族の会「杏の会」

おあしすウェブサイトORコード

1976年2月25日 第３種郵便物認可（毎週４回月・火・木・金曜発行）2021年5月4日SSKO通巻10779号「おあしす通信」2021年4月号

目　次

おあしす福祉会　被災地支援の取組み（年表）―――― 4P
理事長　平松謙一よりごあいさつ　「コロナ禍でむかえた東日本大震災からの10年」―― 5P

【2016　利用者による福島訪問】
- 2016年7月　私たちが見てきたこと、伝えたいこと ―――― 6P
  ＝ ピアワーク・オアシス　利用者代表による福島訪問 ＝
- 寄稿　「震災・人災から十年にして想うこと」 ―――― 8P
  佐藤美喜子さん（飯舘村　元松川第2仮設住宅管理人）
- 寄稿　「当たり前の有難さ、心の循環の輪」 ―――― 9P
  菅野勝也さん（南相馬市　元おあしす職員　NPO法人あさがお職員）
- 各事業所の取り組み（オアシス・プラス、ウィル・オアシス、コム・オアシス） ―― 10P
- 訪れた場所で思うこと ―――― 12P

【2016～2019　熊本支援編】
- 熊本で私たちができること ―――― 13P
  ＝ おあしす福祉会　被災地支援プロジェクト　熊本編　2016～2017 ＝
- 東北と熊本をつなぐ ―――― 16P
  ～ 2018年　東雲の会の皆さんとの支援活動 ～
- 熊本地震から2年　木のおもちゃと熊本の子ども達を訪ねて ―――― 18P
- 地域と熊本をつなぐ ―――― 20P
  ～ 2019年　リコーリース株式会社の皆さんとの支援活動 ～
- ～ 木のおもちゃとともに熊本へ ～　被災から3年半の熊本 ―――― 21P
- 寄稿　「継続ということ　助け合って生きるということ」 ―――― 22P
  濱田龍郎さん（益城町　九州ラーメン党　理事長）
  …濱田龍郎さんとの出会い
- 寄稿　「熊本地震を経験して」 ―――― 23P
  石山美和さん（西原村　元「西原村子育てひろば」支援員）
  …木のおもちゃとともに南阿蘇村に届いたメロディー
- 寄稿　「おあしす福祉会の皆さんへ」 ―――― 24P
  樋口了一さん（熊本市　シンガーソングライター）
  …シンガーソングライター樋口了一と「熊本の子ども達に木のおもちゃを贈る活動」

【2017～2021　シェアリングコンサートへの参加】
- 「シェアリングin新宿」 ―――― 25P
  ～ 分かち合い・共生～チャリティーコンサートでの販売活動が実現 ～
- 寄稿　「震災復興支援チャリティーコンサート『シェアリング』」 ―――― 27P
  岡田信一さん（東京　音楽プロデューサー、ミュージシャン）

【2019～2020　福岡支援編】
- 「集中豪雨から2年後の朝倉市へ」 ―――― 28P
- 寄稿　「おあしす福祉会の皆様へ」 ―――― 29P
  林雅彦さん（朝倉市）

- 私たちが目指したい社会とは ―――― 30P

おあしす福祉会　被災地支援の取組み（年表）

2011年	3月11日　東日本大震災、福島第一原発事故発生 4月　おあしす職員がJDF（日本障害フォーラム）による被災地支援派遣に参加 （2012年7月まで） 5月 「被災地の子ども達に木のおもちゃを贈る活動」開始 リサイクルショップ・オアシスでチャリティ企画開始。売上を全額支援金に 利用者ボーナス捻出活動（特別販売活動）の純利益２０％を支援金とすることになる １１月　日本精神障害者リハビリテーション学会にて演題発表 「精神障害者が東日本大震災の被災地支援に取り組んで」 宮城県名取市の復興イベントに利用者とともに参加
2012年	支援の一環として福島県いわき市スパリゾートハワイアンズへ旅行 小冊子「3.11東日本大震災　そして、私たち…」発行
2013年	オアシス・プラスで「支援カレー」弁当販売開始 福島県郡山市「たちばな幼稚園」にて出張木工教室 岩手県山田町から木を仕入れ、木のおもちゃ作りが始まる 「木のおもちゃのお店・おあしす」をピアワーク・オアシス内にオープン 宮城県宮古市、山田町、陸前高田市、大船渡市、名取市、仙台市に訪問
2014年	「心の傷」を見つめ、沖縄から福島へ　　蟻塚亮二先生講演会 被災地支援チャリティーギターコンサート　小川和隆さん
2015年	「被災地の子ども達に木のおもちゃを贈る活動」協賛金募集開始
2016年	4月　熊本地震発生 おあしす通信「被災地支援特集号」発行 利用者とともに福島を訪問 10月　熊本へ訪問 「熊本の子ども達に木のおもちゃを贈る活動」開始 熊本　九州ラーメン党そよかぜ福祉作業所と製品の取引開始 宮城県名取市閖上を訪問
2017年	福島県　天栄村訪問 シェアリングコンサート2017in新宿に参加 熊本へ2度目の訪問 7月　九州北部集中豪雨発生 東京東雲の避難者「東雲の会」の皆さんとの交流を開始
2018年	東雲の会の皆さんと熊本の子ども達のために木のおもちゃ作り シェアリングコンサート2018in新宿に参加 熊本へ３度目の訪問　おもちゃを贈ったご家族を訪ねる 福島県 松川第2仮設住宅、南相馬市小高、宮城県名取市閖上を訪問 東雲の会の皆さんに熊本訪問を報告 日本精神障害者リハビリテーション学会にて演題発表 「精神障害者が東日本大震災・熊本地震の被災者支援に取り組んで」
2019年	リコーリース株式会社の皆さんと熊本の子ども達のために木のおもちゃ作り シェアリングコンサート2019in新宿に参加 熊本・福岡を訪問「福岡 朝倉市の子ども達に木のおもちゃを贈る活動」開始
2020年	コロナ禍により木のおもちゃ作り中断、シェアリングコンサート中止
2021年	シェアリングコンサート2021in新宿に参加

コロナ禍でむかえた東日本大震災からの１０年

社会福祉法人おあしす福祉会
理事長　平松　謙一

東日本大震災から１０年を迎えました。この１０年間に熊本地震や九州北部豪雨などの大きな災害が続きました。

１０年前、巨大津波の恐ろしさや福島第一原発事故をTVなどで見て、私たちは「自分たちに何かできることはないか」という気持ちに差し迫られました。「被災した子供たちに笑顔を取り戻して欲しい」と始めた木のおもちゃを贈る活動は、おもちゃを持って喜んでいる子供たちの写真やご家族からの手紙で、おあしす福祉会の利用者にとって「自分たちのささやかな取り組みがこんなにも喜んでもらえた」と励まされ、「障がい者」として生きているのではなく、人の役に立つ存在になれることを強く感じられる契機となりました。この感動がおあしす福祉会の被災地支援の原点となり、様々な被災地支援の取り組みとなり、その後の熊本地震や九州北部豪雨でも、利用者から熊本や朝倉市の被災者も支援しようとの声が自然に上がりました。

私たちが１０年も被災地支援を続けてこられたのは「お互いに励ましあいお互いに助け合う」つながりができたからです。この被災地とのつながりは、さらにこの活動を支援してくれる企業や市民も加わり、また東京（江東区東雲）に避難していた東北の被災者が利用者と一緒に木のおもちゃを熊本に贈る取り組みとなり、東北の被災者の方々が「自分たちも被災者として支援を受けるだけでなく、熊本の被災者のために役に立てる」と東北と熊本そして東京をむすぶ絆の広がりとなりました。

私たちはこれからもずっと災害や事故あるいは様々な事情で苦しんでいる人たちとつながり、互いに助け合い励ましあっていくつもりです。それが共生社会を実現する道であり、リカヴァリー（回復）の過程だと確信しています。

さて、わが国で新型コロナウィルス感染が確認されて１年が経過しました。国内の感染者の累計は５０万人を超え、死亡者も１万人に迫っています。変異ウィルスにより更なる感染拡大（爆発）の懸念が強まっています。コロナ禍は障がいの有無にかかわらずすべての国民に襲いかかっています。多くの人が職を失い、これまでの日常生活が制約され、感染の恐怖に襲われています。生活の苦しさだけでなく、人との繋がりがなくなり、不安と恐怖の中で孤立しています。自殺者が増えるだけでなく、不安や恐怖と孤立した生活が１年以上続き、精神的不調や変調をきたす人が増えています。私たちは物理的接触は困難でも、心と心はつながり、互いに励ましあい助け合うことはできることを、この１０年間の被災地支援を通して実感してきました。コロナ禍でも工夫して人と人との繋がりと絆を皆さんと一緒に作っていきたいと願っています。

2016年7月 私たちが見てきたこと、伝えたいこと
＝ ピアワーク・オアシス　利用者代表による福島訪問 ＝

（おあしす通信　2016年10・11月号より）

ピアワーク・オアシスでは利用者が話し合いを重ね、私たちが支援を続けてきた福島に利用者の代表4名を派遣することにした。今回はそのメンバーが見てきた震災から5年経った町の姿や出会った人たちの今について報告する。

「今の福島」を知るために

南相馬沿岸部。折れ曲がった標識以外、見渡す限り何もない景色が広がる。

「やっぱり放射能は不安なんです」福島訪問について検討する中で、利用者の一人がつぶやいた。震災から5年経つが「ニュースではよく聞くけど、実は放射能がどんなものかわからないから怖い」 という利用者が何人もいた。そこで、まず「そもそも放射能とは何か」という事から始めることにした。そして私たちは今回の訪問を前にして、支援活動をしてきた現在の福島について、あらためて全員で学ぶことにした。

相馬沿岸部。遠くなってしまった海がかすかに見える。

東日本大震災以後の福島県の人口減少が他県と比べても決して大きくはないこと、福島産の食品が厳しい検査で安全を確かめてから市場に出されていることなど現在の福島県について知っておくべきことを知り、それでもなぜ原発に関する風評被害が続くのか、私たちは福島で何を見てきたらいいのかを考えた。その結果「知らないということが不安を呼び、デマを信じてしまうのではないか？やはり実際に行って今の福島を自分の目で確かめて来よう」という結論に達した。

南相馬沿岸部。　波の音は聞こえるが海は見えない。フレコンバッグが並び、遠くには堤防しか見えない。

福島県沿岸部の様子

レンタカーを借り、沿岸部を走ってみると津波の起きた地域の海はいまだに堤防の補修が続いていることがわかる。 海は遠くなり、フレコンバッグが並ぶ光景が広がっていた。

飯舘村松川第2仮設住宅 佐藤美喜子さん

今も仮設住宅で暮らす方の話を聴こうと連絡をとったが「もう話したくない」「何度も（震災のことを）聞かれてつらい」と多くの仮設住宅から断られた。そんな中、「断る人の気持ちはわかる。でも現実を知ってもらわないといけないから…」と言って引き受けてくれたのが飯舘村松川第2仮設住宅の管理人で一閑（いっかん）張りという工芸品を住民のみなさんに教えながら暮らす佐藤さんだった。「たくさんあった花や木、私たちが何十年も耕してきた土は除染でみんななくなってしまいました」「先祖から引き継ぎ、次の世代につなぐはずだった土地はもうありません。二度とこんなことがないように、起きたことだけは伝えていかなければいけない、そう思います」佐藤さんはそう語った。 飯舘村は2017年3月に避難指示が解除となり、帰村宣言がされる。しかし全ての住民が戻るとは限らず、元の暮らしに戻れないのではないかという不安を多くの人が抱えている。「『忘れてないんだよ、いつも思ってるんだよ』という気持ちでここに来てくれたことが本当に嬉しいです」佐藤さんは最後にそう言ってくれた。

NPO法人あさがおのみなさん

あさがおのみなさん（右から２番目は元おあしす職員の菅野勝也さん）

あさがおは南相馬市にある障がい者の支援団体だ。一般の住宅と仮設住宅が混在する町の中にあさがおの事業所はある。地震発生直後の様子はあさがおのウェブサイトでも紹介されているが、 実際にはもっと多くの苦労があった。震災後の厳しい状況の中、弱い立場の障がい者は隅に追いやられた。「ゴミみたいな扱い」「放射能のかたまり」避難途中で会った人の態度はそんな風に感じられた。「私たちは普通の人達より良い待遇を受けられなかった。今思えば障がい者のような弱い立場の人の居場所が先に確保されるべきではないでしょうか。でも、緊急の場合には『障害者は死んでしまえ』そんな風に言われたように思いました」　話してくれた震災当時の状況はとても厳しいものだった。救いだったのはつらい経験を語ってくれるみなさんの表情が、今は穏やかだったことだ。原発の危うさを感じながらも原発に依存してきたという反省を胸に仕事に取り組むあさがおのみなさんからは、現実に向き合おうという前向きな姿勢を感じた。追い込まれた状況で障がい者のような弱い立場の人への偏見や差別が強く出たという事実に驚く。もしまた同じような状況が生じた時、私たちは何をすべきか。誰もがどんな状況でもかけがえのない存在であるためにはどうすればいいのか？私たちにとっても大きな課題だ。

希望の牧場　吉沢正巳さん

浪江町にある「希望の牧場」は福島第一原発から14kmの場所にあり、原発事故による被曝で市場に出せなくなった330頭もの牛が飼育されていた。震災後、国は牛たちを殺処分するよう指示を出した。しかし、吉沢さんはこの指示に従わず牛の飼育を続ける。

「福島への差別は永遠に続きます。『来ないでくれ』と言われ、山のようにフレコンバッグを積み上げられる福島は差別地帯です。福島県ではフレコンバッグを山のように積み上げることを『復興』と 言います。『余計なことを言うな』『風評払拭』という言葉にみんな縛られている」「人間は命をどう扱うのか？皆さんにこの圧倒的な数の牛を見て考えてもらいたい」「（牛を守り続ける）俺たちは正しい。間違ってない。でも牛を殺処分した農家も正しい。正しさはひとつじゃなく何通りもあるんです。だからお互いの正しさを認め合うべきなんです。牛たちの処分、保障の額、子どもたちの避難などをめぐり、たくさんの感情的な言い合いが起こりました。今は時間をかけてその深い溝を埋めていきたい。みんな正しかったんです」 人は命をどう扱うべきか？吉沢さんは今も問い続けている。

会津児童園のみなさん

会津児童園にあるおあしす特製のリクエストボックス

会津児童園は会津で唯一の児童養護施設だ。おあしすは子ども達のリクエストに応じて作った木のおもちゃをそれぞれの誕生日にプレゼントしてきた。贈ったおもちゃは喜んでもらえただろうか？緊張しながら施設に向った。未だに通行止めの多い道路がたくさん あり、予定より大きく遅れて到着した私たちを子ども達が玄関で出迎えてくれた。それぞれの手には私たちが贈ったおもちゃがあった。「こわれちゃったんだけど…なおせますか？」針がなくなった時計を抱えた小学生の女の子2人が真っ先に話しかけてくれた。もらった時計が嬉しくて針を何度も回していたら折れてしまったそうだ。手には折れた時計の針が大事に握られていた。プレゼントが届いた時の嬉しさをそれぞれの子どもたちから聞くうちにあっという間に時間となった。壊れたおもちゃを修理することを約束し、私たちは子ども達に別れを告げた。

訪問した利用者の感想

「津波があった沿岸部が整備されているのか知りたかった。飯舘村の避難解除というのは正しいのだろうかと考え込んでしまいました。避難したのに嫌な思いをしたというあさがおの皆さんの話を聴いて、あってはいけないことだと思いました。今回の訪問は（これから先の自分にとって）生きる自信にもなるんじゃないかと思います」

「訪問する前は『みんなを代表して行くからにはしっかり話を聴いてこなければ』と思っていました。あさがおの皆さんの話からは『極限の状況になると精神障害者はまだまだ差別されてしまうのかな』と思いました。希望の牧場の吉沢さんからは「熱さ」を感じました。熱くならざるをえなかったのかな・・・。皆さんの話から震災を風化させてはいけないという思いを強く感じました。今回の福島訪問は自分自身の考え方というか、僕の生き方にも関わってくるのかなと思います」

「テレビでは見ることができない所を見るいい機会だと思って訪問を希望しました。飯舘村の佐藤さんに作ったおもちゃを受け取ってもらえた時は嬉しかったです。自分達が来たことを覚えていてほしいと思いました。また会津児童園では自分達の作ったおもちゃを子どもたちが大事 にしてくれているのを見て、頑張ってきたことが報われた気がしました。津波が来た地域には何もなく言葉が出ませんでした。地震の前にどんな景色があったのか想像もつきませんでした。今回の訪問を一度きりでは終わらせたくないですね。できれば何回も（東北に）行きたいと思います」

「『選ばれたからには責任を持って（現地の人の話を）聴いてこなければいけない』と思ったけど、前の晩は2時間しか眠れませんでした。飯舘村や沿岸部のフレコンバッグの量には驚きました。何もない風景を見て津波の脅威を感じました。東京オリンピックをやってる場合じゃないと思いますけどね。会津児童園では子ども達の素敵な笑顔が見られて最高でした。今度は東京にみんなを呼んで話を聴きたいと思います」

福島県飯舘村からのメッセージ

震災・人災から十年にして想うこと

佐藤　美喜子

全国の皆様に支えられて十年、本当にありがとうございました。

あの当時は一日がとても長く感じましたが、過ぎてしまえばあっという間だったようにも思います。多くの皆様のお力を頂いて現在があるものと確信し感謝を致します。

あんなにも大変だった仮設住宅での暮らしが今になるとなんと中身の濃い暮らしだったことか。同じ苦しみを持つ同志であることが強く結びついたこと、助け合うことの尊さ、喜びを学んだのでした。そしてコミュニティが充実していったのです。その土台には言うまでもなく多くの方々のご支援と、あたたかいお言葉によって築けたものでした。

私たちは大切なものをたくさん失くしました。しかし、そんな中でも唯一得たものと言えば、多くの皆様との新たな出会いでした。それが大きな喜び、宝となったのです。

本当に感謝です。人としてどう生きるべきかとも学ばせて頂きました。これからは私達が皆様から頂きましたお心を、どなたかに恩返しが出来ればと思っております。

私達は自然災害というよりは原発という人災を受けたのです。原発さえなければ、六年にも長きにわたって避難することはなかったでしょう。現在、飯舘村に戻っている村民は全体の２３％程、そしてその多くは高齢者なのです。元の生活が出来るものと期待して戻ったものの、となりの友人が戻ってこない、こんなはずではなかったと言うのです。買い物は一ヵ所のコンビニだけ、病院は午前だけの診療所と大変不自由な生活ですが、それでも残された人生を古里でという想いから村に戻ったのです。

十年となる今、強く思うことは、二度とあってはならない原発事故を決して風化させることのない様、子供たち、孫たちの未来の為にも後世に言い伝えなければなりません。どうか福島から学んでほしいと願うものです。このコロナ問題ですっかり薄れてしまいましたが、どうか忘れないでと願うばかりです。どの様な災害においても命を守ることを最優先しなければなりません。

まだまだ復興などしておりません。心の復興がなくしては復興と呼べるものではありませんが、みんなで頑張っていきます。

十年もの長い間、本当に、ほんとうにありがとうございました。

福島県南相馬市からのメッセージ

当たり前の有難さ、　心の循環の輪

特定非営利活動法人あさがお
菅野　勝也

おあしすの皆さんが訪問してくれたのは、2016年夏、私が福島県に戻ってきて、約1年後のことでした。私は市民として南相馬市についてできる限り伝えたいと思い、震災・津波の怖さと、未来への希望を感じることができる「鹿島の一本松」や、人々が集まる賑やかな飲食店を案内しました。久しぶりにおあしすの皆さんとお話でき、嬉しく、楽しい時間でした。自分自身が福島県に帰ってきて、障がいのある方々のため、福島県のために、力になれているだろうか悩んでいた時に、立ち止まって振り返る機会となりました。おあしすの皆さんにエンパワメントされ、福島県のことを発信する責任をより強く感じるとともに、支援者として、福島県民としてもっと頑張ろうというモチベーションになりました。

そして、あれから約5年が経ちます。その間、様々な方との出会いがあり、そして別れもありました。原発事故による避難生活により、精神障がい者となったり、症状が悪化し、今でも家族と離れ離れになって暮らしている方もいれば、自死という選択をしてしまった方もいました。原発事故という人災が、一人ひとりの人生を変えてしまったということを痛感してきました。

東日本大震災等の災害や人との別れ、現在のコロナ禍を経験すると、当たり前だと思っていたことが、有難いことだと気づきます。災害は全国で起きています。しかし、外からだと自分には関係のない世界で起きていること、他人事だと思ってしまいがちだと思います。これは、自分自身への戒めでもあります。だからこそ、自分の命を大事にし、他の人のことを大事にし、一瞬一瞬を大事にしなくていけないと思います。被災するのも、障がい者となるのも、数時間前まで一緒にいた人と離れ離れになることも、他人事ではなく、自分にも起こり得ることだということを、皆様にも改めて考えていただきたいと思います。

東日本大震災から10年が経とうとしている今、同じ福島県の中でも、市町村ごと、そして地域ごとに状況は異なります。

例えば、2016年におあしすの皆さんが訪問した飯舘村は、東日本大震災以前は人口約6300人の村でした。現在住民票がある村民は、約5300人ですが、そのうち現在実際に村に居住しているのは約1500人です。避難先へ住民票を移す住民も年々増えてきています。一方で、県内外から約180人の転入者がおり、村の新たな力となっています。子どもにおいては、こども園と中高一貫教育を行う義務教育学校の合計人数122人のうち、33人は村内に居住しています。村内の福祉サービスが不足している分、近隣市町村の資源が使えるように、送迎サービスを行ったり、送迎費用を助成するなど、村独自のサービスが行われています。また、既存の高齢者施設や宿泊施設が再開したり、新たに子どもの遊び場や住民の交流の場ができています。

南相馬市においても、「自薦ヘルパー制度」というヘルパーが不足している地域でもヘルパーを確保できる仕組みを通し、ＡＬＳ（筋萎縮性側索硬化症）の方の人生を応援する県内外の支援者とも繋がることができました。南相馬市や飯舘村は社会資源が不足していると言われる地域ではありますが、だからこそ人と人との心の循環が強くなり、心の循環の輪が広がっていっているのだと思います。当たり前の有難さについて、身をもって感じてきた地域だからかもしれません。

互いにエンパワメントされる関係は、被災者と支援者という関係でも、障がい者と被災者という関係でも共通なのだと感じます。私はこれからも「当たり前の有難さ」を感じながら「心の循環の輪」を広げることで、支援者として、福島県民として、さらに新しい社会資源や、人との繋がりをつくり、全ての住民が生きたいと思い、生き生きと暮らせるまち、県内外の人が来たいと思えるまちづくりをしていきます。

そして、今までの5年間は福島県のことで必死でしたが（自分への言い訳かもしれません）、これからは、おあしす福祉会の皆さんや、全国の皆様、他の被災地の皆様に恩返しをしていきたいと思います。

各事業所の取組み（オアシス・プラス/ウィル・オアシス）

「支援カレーの日」を続けて８年経ちました

オアシス・プラスは2013年3月から毎月11日を「支援カレーの日」として、岩手県宮古市にある『カリー亭』の骨付きチキンカレー弁当を販売しています。

『カリー亭』は、岩手県宮古市の「うまいもん製造所　就労継続支援A型事業所鳥もと」様が運営する店舗の一つ。店舗営業以外に東北の素材を活かしたレトルトカレーや、炊き込みごはんの素、手羽先など、普段『道の駅みやこ』で販売される商品をネット通販でも販売されています。

【カリー亭様ホームページ（https://www.torimoto.jp/curry.html）より写真掲載】

『カリー亭』代表の小幡様とおあしすの出会いは2011年。木のおもちゃを贈る活動の始まりとして東北の各地を訪問した際に出会いました。「日本で一番小さなレトルトカレー工場」として、障がいのある人たちの働く場として、当時からとてもクオリティの高いカレーを製造販売されていました。現在は本格インドカレー店として、さらに素敵なお店となっているそうです。

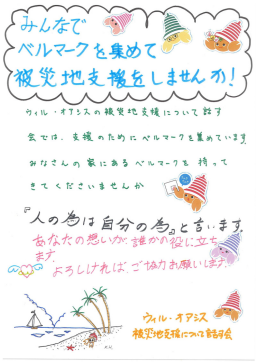
オアシス・プラスでは少しでも多くのお客様に被災地支援について考えるきっかけになって欲しいと考え、ほぼ原価で販売してきました。2013年から2021年3月の８年間で約6,500食（年間812食、月67食）、売上にして約325万円分、販売いたしました。震災から10年となる2021年に入ってからは、徐々に数が増え、普段のお弁当は80食くらいの注文が、支援カレーの日は100食を超えることもありました。あれから10年経って、多くのことが復興していると信じたいけれど、未だ様々な困難や影響も少なくないであろうことを、東京にいる多くの人はわかっているからでは？と思ったり、直接的な支援はほとんど不要となった現在でも何か支援につながることに関われたら？と思ったりしている方々の思いを「支援カレーの日」に感じることがあります。

また単純にとってもおいしくてクオリティの高い商品ですから、お客様から「どこで買えるの？」などお問い合わせ頂くこともあり、支援カレーの日以外に特別に受注することも増えました。その度に震災の話、東北の話、当時のそれぞれの思いを話す機会にもなっています。

私たちができることは小さな事だけれども、実際に出会ってつながったご縁を途切れさせずに、忘れないこと、他人事にしないこと、互いに思い合うことを今後も続けていきたいと思います。そして、そろそろ支援カレー弁当の値上げも考えようかな・・・？と思ったりしております。また、カリー亭様以外にもなんらかの災害等で大変な経験をされた障がい者就労支援施設の商品を取り扱うことも考えていきたいと思っています。

（友田　奈津美）

自分たちでもできる支援を！　2015年から想いを寄せ続けてます



地域活動支援センターウィル・オアシスでは、震災発生直後から様々な活動を続けてきましたが2015年にクリスマス会の話し合いをした際、「自分たちがこうして楽しんでいる時に、被災して辛い状況にいる方々がいる。自分たちも何か支援できることはないか？」という利用者さんから声があがり、どのような支援ができるか話し合いを重ね、『被災地支援について話す会』が発足しました。

『被災地支援について話す会』では、「支援はまだまだ必要であり、続けていくことが大事だ」という意見が繰り返し出され、“誰にでもできて、長く続けられる被災地支援を！”ということから『ベルマークを集めて被災地支援をしよう！(※)』ということになりました。

まずは、参加者で協力してポスターを作成しました。すると、利用者さん各々が買い物をする時にベルマーク商品を選ぶようになったり、話す会に参加していなかった方もベルマークを持ってきたりする姿も見受けられ、徐々に広がりを見せていきました。さらには、この活動を知った地域の方からも、ベルマークがお手紙とともに届くなど、事業所を越えた活動にもなりました。

ベルマークのベルは、「国内外のお友達に“愛の鐘”を鳴り響かせよう」という助け合いのシンボルマークです。ウィル・オアシスの取り組みは小さなものかもしれませんが、継続することで被災地に思いを寄せ、少しでも助け合いに役立ち、愛の鐘を鳴り響かせることができればという気持ちで、現在も続けています。（磯田　渉）

※ベルマーク運動は、未来を担う子どもたちの教育環境整備の助成運動をおこなう活動です。一枚＝１円に換算されて、被災地の学校で使用される教材を購入することができます。

各事業所の取組み（コム・オアシス）

わたしたちができる支援をつづけていきたい

■リサイクルショップの被災地支援活動

２０１１年に東日本大震災が起きた後、わたしたちは「被災地のためにできる支援活動はないだろうか」「何かの形で被災地の力になれないだろうか」と考えました。当時はリサイクルショップの売り場を広げ、リニューアルオープンをする準備の真っ最中でした。そこでオープンセール3日間の売り上げを支援金として寄付することにしました。わたしたちの活動趣旨を複数の新聞社に訴え、取り上げていただきました。その結果日本全国から300件以上の物品と応援のメッセージが届き、3日間の売り上げ額は113,804円になりました。

以後、リサイクルショップでは、毎月第2・第4水曜日を『被災地チャリティーの日』と位置づけ、この2日間の売り上げ全額を被災地へ寄付してきました。その他に、売り場がなくなった千葉県の特別支援学校で作られた大根を販売し、売り上げの半分を支援金に充てたり、『東北応援フェア』を開催し被災地の障がい者施設で作られたお菓子やお米など食品を販売しました。商品だけではなく、被災地の様子や事業所の紹介や東北で暮らす人たちの様子や障がい者施設の紹介をおこなってきました。

現在では、レジ横に支援金箱を設置するほか、被災地の障がい者施設で作られたろうそくやハンカチなどの自主製品を取り扱い販売することで支援を続けています。

■販売活動を通じて、被災地の障がい者施設を応援したい！

コム・オアシスでは、春・夏・冬の年3回『おあしす応援商品』と銘打っての販売活動をしています。これは被災した障がい者施設の商品を販売する活動で、2021年で8年目を迎えました。

この取組みはこれまでおあしすが実際に支援活動等を通じて、直接関わりご縁のあった施設の商品を東京の多くの人に紹介し、被災地施設の売上向上につながります。

現在コム・オアシスで連携している施設は①岩手県宮古市「うまいもん製造所　就労継続支援A型事業所鳥もと」、②岩手県釜石市「みやこワークステーション」、③熊本県上益城郡益城町「九州ラーメン党そよかぜ福祉作業所」の3カ所。

「鳥もと」様はレトルトカレーの販売から開始して、現時は岩手県産の鶏手羽焼（3種類）も新たに取り扱い始めました。

商品を通じて、様々な人たちとつながりたい

「みやこワークステーション」様からは自家焙煎のドリップパックコーヒーを仕入れていますが、豆の挽き方違いで選べるよう取り扱う種類を増やしたところ、売上げが徐々に伸びてきました。

「九州ラーメン党」様は2016年4月に発生した熊本地震への支援活動の中で知り合い、それ以降ラーメン（塩・とんこつの2種）を取り扱っています。

これらの商品は年3回の販売活動以外に、おあしすの法人全体行事や、被災地支援に関するイベント（映画上映会、シェアリングコンサート）での出張販売も行ってきました。出張販売では、利用者が販売員としてお客様に被災地のこと、私たちの取組みが支援につながること等を熱心に説明する姿もありました。

わたしたちは「震災を忘れてはならない」この思いを胸に刻み、支援活動を通して熊本や東北で知り合った方々の顔を思い浮かべながら、この活動を今後も続けていこうと思います。そして出会った方たちとつながりを大切にともに歩んでいければと思います。

訪れた場所で思うこと

東日本大震災から１０年が経った。

「被災地」とは何を指すのか、「復興」とは何を指すのか。被災地支援プロジェクトというものに関わり、様々な土地を訪れながら、この数年間悩み続けている。１０年という月日の中で人や町はそれぞれに変わった。「被災地は」「東北は」「福島は」と大きな主語で何かを語ると必ずそこからこぼれ落ちてしまう人がいる。「復興」「絆」という言葉もそうだ。被災直後に盛んに使われた強く眩しい言葉の影にいる人に時々出会う。これからオリンピックで活躍するアスリートの活躍に生きる希望を見出す人もいるだろう。しかし、復興の象徴であるはずの祭りを前にやり場のない不安や怒りを抱く人もいる。

「復興には程遠い」などと言うつもりはない。着実に進んでいることは間違いなくある。しかし、一人ひとりの思いは東京にいるだけではわからないことも多い。１０年という歳月も、「被災地」や「復興」という言葉が意味するところも人によって全く違う。様々な人に出会うほど、そのことを強く感じ「被災地」や「復興」について安易に語ることを躊躇してしまう。

閖上にある慰霊碑。震災で亡くなった944人の名が刻まれている。（2018年10月撮影）

この１０年間で記事にできなかった事がいくつもある。

2011年4月、支援者として初めて訪れた宮城の仙台空港近くでは津波の被害を目にして呆然と立ち尽くした。最も被害が大きかった閖上地区には入ることもできず、自分の無力さをただ感じるばかりで東京に戻った。その時に出会った名取市And You（当時）の渋谷裕美子さんの案内で閖上地区を訪れることが出来たのは2016年の冬だった。5年経ってようやく訪れることができた閖上だったが何かができるわけでもなく、かつて人が往き来したはずの場所を眺めた。数枚の写真を撮るのがやっとで、持ってきたビデオカメラもまわせず、ただ5年後の閖上を自分の目に焼き付けることしかできなかった。

飯舘村松川第２仮設住宅　（2016年7月撮影）

飯舘村の佐藤美喜子さんとは二度お会いしている。本文中にある2016年7月、そして2018年10月だ。仮設住宅から飯舘村に戻る準備をしていた佐藤さんは被災当時と同じように眠れない夜を過ごしていると言っていた。仮設住宅でようやく築いたコミュニティがまたバラバラになることに心を痛めていた。かつての帰還困難区域に戻る人は少なく、町が元通りになるわけではない。人々が抱える問題は今も多く残る。最も重要な課題は新たな人と人との関わりをどれだけ豊かに持てるか、生活していく土地で（医療、福祉、交通などの環境面を含め）安心して暮らせる地域社会をいかに築くか、ではないだろうか。

南相馬市の小高に行ったきっかけはたまたま見かけたツイッターの「観に来てください」の一言だった。つぶやきの主、作家の柳 美里さんは震災後、津波被害に遭った小高に移り住みブックカフェ「フルハウス」を経営しながら劇団「青春五月党」を主宰している。書店には選び抜かれた素敵な本が並び、奥のアトリエでは素晴らしい芝居が上演される。私たち以上の思いで行動する人がいることを嬉しく思う。

訪れると「もう大丈夫」と笑って再訪を歓迎してくれる方も多いが、一方で住むことを諦め、かつての自宅と東京を今も行き来しているという浪江の方、「もう東京の人たちは私たちのことなんて考えていないでしょう？」と訴えた南相馬の方が忘れられない。確かに私自身、足を運ぶまでわからなかったことは多い。あの時に答えた「東京の人に伝えて、考えてもらうためにここに来ました」という言葉が嘘にならないようにしたい。

小高在住の作家　柳美里さんのブックカフェ「フルハウス」（2019年11月撮影）

これからの長い日々を生き延びるためにつらい記憶を忘れる、もう語りたくないという思いの方もいるだろう。私たちはせめて、出会って話してくれた方々の声一つひとつに、そしてその笑顔と言葉の奥にあるものにも耳を傾け、これからも伝えていきたい。　（武藤　康司）

熊本で私たちができること
＝おあしす福祉会　被災地支援プロジェクト　熊本編　2016～2017＝
（おあしす通信　2017年１・２月号より）

おあしす福祉会では、東日本大震災で被災した東北の方々への支援活動として、「木のおもちゃを子どもたちに贈る活動」を5年間続けてきた。
2016年4月に起きた熊本地震についても「東北と同じようにできないだろうか」という声が利用者、職員の間から出ていたことから10月に熊本で開催されたきょうされん全国大会に合わせて現地を訪れることにした。

2016年10月
◇被災の様子

熊本空港のある益城町（ましきまち）は、今回の地震で特に大きな被害があった地域だ。東京から飛行機で約2時間、上空から見える町には壊れた家屋を覆うブルーシートが目立つ。車で空港から街の中心地に向かうにつれて倒壊した家屋が多くなっていく。震災から半年過ぎているにもかかわらず、町にはまだたくさんの倒壊した家屋が撤去されないまま残っていた。

破損した家屋の屋根にはブルーシートが掛けられている

益城町内の木山神社　社の柱が崩れ屋根が地面についている。町の人々にとっての心の支えである神社が今も痛々しい姿のまま修復されずにいる

◇熊本で出会ったみなさん
～　熊本大学　佐藤嘉洋さんと益城町役場　～

出発直前までに様々な機関に連絡をとり、返事をくれたのが熊本大学政策想像研究教育センターの佐藤嘉洋さんだった。熊本大学は震災発生後「熊本復興支援プロジェクト」を設置し、復興プロジェクトチームが様々な活動をおこなっている。私たちは佐藤さんに被災地域を案内してもらい、益城町役場復興課を紹介していただいた。これがきっかけとなり益城町での活動が大きく進んだ。

～　シンガーソングライター　樋口了一さん　～

樋口了一さんは人気テレビ番組「水曜どうでしょう」のテーマ曲「1/６の夢旅人 2002」や日本レコード大賞優秀曲賞などを獲得した「手紙 親愛なる子どもたちへ」などのヒット曲を持ち、今回のきょうされん全国大会のゲストでもあった。樋口さんは活動への協力を快諾、自身のラジオ番組「帰ってきた夢旅人」（エフエム熊本他）で「木のおもちゃを贈る活動」を何度も紹介してくれた。番組で活動を知った方からおもちゃの申し込みが多く届いている。

～　ましきさいがいFM　～

ましきさいがいＦＭのみなさん

ましきさいがいFMは、益城町役場からのお知らせや生活情報を提供する臨時災害FM放送局だ。滞在最終日、新聞記事の中にこの放送局を見つけた私たちは飛び込みで活動への協力をお願いした。それ以来、活動を放送で紹介してくれている。

◇九州ラーメン党　そよかぜ福祉作業所

九州ラーメン党は障害者や高齢者の支援をしながら突発的な災害救援活動に取り組んできた団体で、今まで雲仙普賢岳の噴火、阪神淡路大震災、東日本大震災などで支援活動をおこなってきた。しかし、今回の地震で益城町にあった施設が全壊してしまった。

そよかぜ福祉作業所
理事長　濱田龍郎氏（右）

◇益城町　町立保育所、児童館のみなさん

益城町児童館からのメッセージカード

益城町では5カ所の町立保育所、児童館を訪問した。「地震発生が夜だったため、子どもたちは自宅で怖い思いをした。日中の笑顔は戻りつつあるが、家に帰ると落ち着かなくなったり不安を訴えることがある」とのことだった。また保育士たちの自宅も大きな被害を受けた。大人も先の光が見えない状況で「地震後、ここに来て子どもたちの顔を見て過ごすことが一番の救いになっている」「大変な中でも園児の元気な姿に救われ、励まされ、力をもらえた」と話していた。

益城町児童館は地震発生直後から児童館が避難所となり、再開は被災半年後の10月だった。おもちゃのお礼として後日届いた児童館の職員さんや子どもたちからのメッセージカードには「地震にも負けません！がんばるばい！益城！」との力強い言葉があった。

◇認定NPO法人とら太の会のみなさん

八代（やつしろ）町の『NPO法人とら太の会』はきょうされんを通じて訪問した。おもちゃを手にしながら床で転がして遊ぶみんなの笑顔がとても印象的だった。一方で自宅に帰ると震災時を思い出して調子を崩してしまい、入退院を繰り返しているお子さんもいるとのことだ。「今では震度１でも直ぐに身体が反応して『くるか！』と身構える」と話す方もいた。余震が半年もの間続いていたことによる心理的影響は計り知れない。

とら太の会のみなさん（左）子ども達からのお礼状（右）

2017年4月

◇半年ぶりに見た街の様子

上空から見た熊本の街は壊れた家屋を覆っていたブルーシートがかなり減っていた。飛行機の中から「ああ、よかった」と思ったが、レンタカーを借りて桜の咲く益城町の中を走ると、まだ決して手放しで喜べる状態ではないことに気づく。大きな道路沿いにある瓦礫の撤去は進んだものの、住宅地の破損した家屋の取り壊しと撤去はまだこれからの地域が多い。前回見た益城町の木山神宮も狛犬は戻ってきたものの、柱部分が潰れ、屋根だけの姿になった社殿はそのままの姿で残っていた。

木山神宮。社殿は半年前と同じ状態だった。

◇益城町役場

益城町ではまず、昨年から協力していただいている復興課にお礼を言うため役場を訪れた。益城町役場は本庁舎の破損がひどく、今もプレハブの仮庁舎で業務がおこなわれている。地震から1年経ち、復興課は生活再建支援課と名称が変更されていた。仮設住宅の入居期間は2年を目処としており、その後についてはまだ決まっていない。転居する方は少しずつ出てきているものの町の住環境が整備されるのはまだ先になるようだった。

益城町役場本庁舎。建物が歪み、壁面に亀裂が残る。役所の業務は隣接するプレハブの仮庁舎でおこなわれている。

◇ましきラボ（熊本大学）　佐藤嘉洋さん

今回は益城町の中にある町の復興、まちづくりの拠点として熊本大学が開設した「ましきラボ」でお会いした。「町の中に瓦礫がある時は『悲しい』と思ったけれど、瓦礫が撤去され更地になると今度は『寂しい』と感じます」

佐藤さんの言葉は少しずつ変わっていく町の様子と暮らしている人の気持ちを映し出していた。

熊本大学　ましきラボ。コンテナを利用している。住民が抱える不安に対応しつつ、今後の町のあり方を考察する。

◇西原村　地域支え合いセンター

西原村地域支え合いセンター　後藤由香莉さん

西原村は益城町と同じく地震の被害が非常に大きかった地域だ。前回の訪問では時間がなく行くことができなかった。半年前に遠くから眺めたブルーシートだらけの町並みの向こうにある村がやはり気になり訪れてみた。役場に向かう山道はまだ所々で山肌が崩れ、片側の車線を塞いでいる。村の地域支え合いセンター職員 後藤由香莉さんによるとセンターの横には仮設住宅では今も約300世帯が生活しているとのことだった。

◇九州ラーメン党　そよ風福祉作業所再建と シンガーソングライター　樋口了一さんのライブ

地震で倒壊した益城町のそよかぜ福祉作業所の再建イベント「復幸祭」への参加は今回の訪問の目的のひとつであった。作業所は震災から1年で再建された。しかし、同時に開店するはずだった新しいラーメン店舗は工事が遅れ、まだ完成していなかった。隣接の「復興市場」には九州ラーメン党が東日本大震災で支援してきた東北の製品やおあしすの木のおもちゃが並ぶ。イベントではおあしすの活動を応援してくれているシンガーソングライター 樋口了一さんのライブがおこなわれた。

シンガーソングライター　樋口了一さん（左）と九州ラーメン党そよ風福祉作業所の濱田達郎さん

ライブでは「オカエリナサイが聞こえる町」という歌も歌われた。この曲は本来益城町の移住促進PRのために作られたものだが、今では益城町の復興ソングとして「ましきさいがいFM」で毎日流れる。会場では木のおもちゃを申し込んでくれた方々にもお会いできた。ある方は「申し込み当時、通っていなかった水道がようやく通りました」と嬉しそうに話してくれた。

益城町で1年前の状況を聞くと、多くの方が「実は余りにも大変で細かいことははっきり覚えていない」と言う。このことについて樋口さんが今年の4月14日、自身のツイッターでこんな風につぶやいている。「1年前、ここにいて、もみくちゃにされて、家に向かった。よく覚えていないのに、鮮明に刻まれている。異次元の記憶のようだ」

きっと多くの人が同じような気持ちでいる。地震は町だけでなく人の心にも大きな衝撃を与えたのだろう。復旧が十分でない状態が続き、震災後に体調を崩すなどした「災害関連死」の認定は熊本・大分両県を合わせるとこの1年で200名を超えた。大変な状況は続く。私たちはこれからも熊本の支援を続け、みなさんに少しでも笑顔になっていただきたいと思う。